奇遇

芥川龍之介

編輯者　支那へ旅行するそうですね。南ですか？北ですか？

小説家　南から北へ周るつもりです。

編輯者　準備はもう出来たのですか？

小説家　大抵出来ました。ただ読む筈だった紀行や地誌なぞが、未だに読み切れないのに弱っています。

編輯者　（気がなさそうに）そんな本が何冊もあるのですか？

小説家　存外ありますよ。日本人が書いたのでは、七十八日遊記、支那文明記、支那漫遊記、支那仏教遺物、支那風俗、支那人気質、燕山楚水、蘇浙小観、北清見

聞録、長江十年、観光紀游、征塵録、満洲、巴蜀、湖南、漢口、支那風韻記、支那――

編輯者　それをみんな読んだのですか？

小説家　何、まだ一冊も読まないのです。それから支那人が書いた本では、大清一統志、燕都遊覧志、長安客話、帝京――

編輯者　いや、もう本の名は沢山です。

小説家　まだ西洋人が書いた本は、一冊も云わなかったと思いますが、――

編輯者　西洋人の書いた支那の本なぞには、どうせ碌な物はないでしょう。それより小説は出発前に、きっ

と書いて貰えるでしょうね。

小説家　（急に悄気る）さあ、とにかくその前には、書き上げるつもりでいるのですが、――

編輯者　一体何時出発する予定ですか？

小説家　実は今日出発する予定なのです。

編輯者　（驚いたように）今日ですか？

小説家　ええ、五時の急行に乗る筈なのです。

編輯者　するともう出発前には、半時間しかないじゃありませんか？

小説家　まあそう云う勘定です。

編輯者　（腹を立てたように）では小説はどうなるの

ですか？

小説家　（いよいよ悄気(しょげ)る）僕もどうなるかと思っているのです。

編輯者　どうもそう無責任では困りますなあ。しかし何しろ半時間ばかりでは、急に書いても貰えないでしょうし、……

小説家　そうですね。ウェデキンドの芝居だと、この半時間ばかりの間(あいだ)にも、不遇の音楽家が飛びこんで来たり、どこかの奥さんが自殺したり、いろいろな事件が起るのですが、――御待ちなさいよ。事によると机の抽斗(ひきだし)に、まだ何か発表しない原稿があるかも知れ

ません。
編輯者　そうすると非常に好都合ですが――
小説家　（机の抽斗を探しながら）論文ではいけない
でしょうね。
編輯者　何と云う論文ですか？
小説家　「文芸に及ぼすジャアナリズムの害毒」と云
うのです。
編輯者　そんな論文はいけません。
小説家　これはどうですか？　まあ、体裁の上では
小品ですが、――
編輯者　「奇遇」と云う題ですね。どんな事を書いた

のですか？

小説家　ちょいと読んで見ましょうか？　二十分ばかりかかれば読めますから、――

×　　×　　×

至順年間の事である。長江に臨んだ古金陵の地に、王生と云う青年があった。生れつき才力が豊な上に、容貌もまた美しい。何でも奇俊王家郎と称されたと云うから、その風采想うべしである。しかも年は二十に

なったが、妻はまだ娶っていない。家は門地も正しいし、親譲りの資産も相当にある。詩酒の風流を恣にするには、こんな都合の好い身分はない。

実際また王生は、仲の好い友人の趙生と一しょに、自由な生活を送っていた。戯を聴きに行く事もある。博を打って暮らす事もある。あるいはまた一晩中、秦淮あたりの酒家の卓子に、酒を飲み明かすことなぞもある。そう云う時には落着いた王生が、花磁盞を前にうっとりと、どこかの歌の声に聞き入っていると、陽気な趙生は酢蟹を肴に、金華酒の満を引きながら、盛んに妓品なぞを論じ立てるのである。

その王生がどう云う訳か、去年の秋以来忘れたように、ばったり痛飲を試みなくなった。いや、痛飲ばかりではない。吃喝嫖賭（きっかつひょうと）の道楽にも、全然遠のいてしまったのである。趙生を始め大勢の友人たちは、勿論この変化を不思議に思った。王生ももう道楽には、飽きたのかも知れないと云うものがある。いや、どこかに可愛い女が、出来たのだろうと云うものもある。が、肝腎（かんじん）の王生自身は、何度その訳を尋ねられても、ただ微笑を洩らすばかりで、何がどうしたとも返事をしない。

そんな事が一年ほど続いた後（のち）、ある日趙生が久しぶ

りに、王生の家を訪れると、彼は昨夜作ったと云って、元稹体の会真詩三十韻を出して見せた。詩は花やかな対句の中に、絶えず嗟嘆の意が洩らしてある。恋をしている青年でもなければ、こう云う詩はたとい一行でも、書く事が出来ないに違いない。趙生は詩稿を王生に返すと、狡猾そうにちらりと相手を見ながら、

「君の鶯鶯はどこにいるのだ。」と云った。

「僕の鶯鶯？　そんなものがあるものか。」

「嘘をつき給え。論より証拠はその指環じゃないか。」

なるほど趙生が指さした几の上には、紫金碧甸の

指環が一つ、読みさした本の上に転がっている。指環の主は勿論男ではない。が、王生（おうせい）はそれを取り上げると、ちょいと顔を暗くしたが、しかし存外平然と、徐（おもむ）ろにこんな話をし出した。

「僕の鶯鶯なぞと云うものはない。が、僕の恋をしている女はある。僕が去年の秋以来、君たちと太白（たいはく）を挙げなくなったのは、確かにその女が出来たからだ。しかしその女と僕との関係は、君たちが想像しているような、ありふれた才子の情事ではない。こう云ったばかりでは何の事だか、勿論君にはのみこめないだろう。いや、のみこめないばかりなら好（い）いが、あるいは万事

が嘘のような疑いを抱きたくなるかも知れない。それでは僕も不本意だから、この際君に一切の事情をすっかり打ち明けてしまおうと思う。退屈でもどうか一通り、その女の話を聞いてくれ給え。

「僕は君が知っている通り、松江に田を持っている。そうして毎年秋になると、一年の年貢を取り立てるために、僕自身あそこへ下って行く。所がちょうど去年の秋、やはり松江へ下った帰りに、舟が渭塘のほとりまで来ると、柳や槐に囲まれながら、酒旗を出した家が一軒見える。朱塗りの欄干が画いたように、折れ曲っている容子なぞでは、中々大きな構えらしい。そ

のまた欄干の続いた外には、紅い芙蓉が何十株も、川の水に影を落している。僕は喉が渇いていたから、早速その酒旗の出ている家へ、舟をつけろと云いつけたものだ。

「さてそこへ上って見ると、案の定家も手広ければ、主の翁も卑しくない。その上酒は竹葉青、肴は鱸に蟹と云うのだから、僕の満足は察してくれ給え。実際僕は久しぶりに、旅愁も何も忘れながら、陶然と盃を口にしていた。その内にふと気がつくと、誰か一人幕の陰から、時々こちらを覗くものがある。が、僕はそちらを見るが早いか、すぐに幕の後へ隠れて

しまう。そうして僕が眼を外(そ)らせば、じっとまたこちらを見つめている。何だか翡翠(ひすい)の簪(かんざし)や金の耳環(みみわ)が幕の間(あいだ)に、ちらめくような気がするが、確かにそうかどうか判然しない。現に一度なぞは玉のような顔が、ちらりとそこに見えたように思う。が、急にふり返ると、やはりただ幕ばかりが、懶(ものう)そうにだらりと下(さが)っている。そんな事を繰(く)り返している内に、僕はだんだん酒を飲むのが、妙につまらなくなって来たから、何枚かの銭(ぜに)を抛(ほう)り出すと、匆々(そうそう)また舟へ帰って来た。

「ところがその晩舟の中に、独りうとうとと眠っていると、僕は夢にもう一度、あの酒旗の出ている家(うち)へ行っ

た。昼来た時には知らなかったが、家（うち）には門が何重（なんじゅう）もある、その門を皆通り抜けた、一番奥まった家（いえ）の後（うしろ）に、小さな綉閣（しゅうかく）が一軒見える。その前には見事な葡萄棚（ぶどうだな）があり、葡萄棚の下には石を畳（たた）んだ、一丈ばかりの泉水がある。僕はその池のほとりへ来た時、水の中の金魚が月の光に、はっきり数えられたのも覚えている。池の左右に植わっているのは、二株（ふたかぶ）とも垂糸檜（すいしかい）に違いない。それからまた墻（しょう）に寄せては、翠柏（すいはく）の屏（へい）が結んである。その下にあるのは天工のように、石を積んだ築山（つきやま）である。築山の草はことごとく金糸線綉墩（きんしせんしゅうとん）の属（ぞく）ばかりだから、この頃のうそ寒（さむ）にも凋（しお）れていない。

窓の間には彫花（ちょうか）の籠（かご）に、緑色の鸚鵡（おうむ）が飼ってある。その鸚鵡が僕を見ると、「今晩は」と云ったのも忘れられない。軒の下には宙に吊（つ）った、小さな木鶴（もっかく）の一双（ひとつが）いが、煙の立つ線香を啣（くわ）えている。窓の中を覗いて見ると、几（つくえ）の上の古銅瓶（こどうへい）に、孔雀（くじゃく）の尾が何本も挿（さ）してある。その側にある筆硯類（ひっけんるい）は、いずれも清楚（せいそ）と云うほかはない。と思うとまた人を待つように、碧玉の簫（しょう）などもかかっている。壁には四幅（しふく）の金花箋（きんかせん）を貼って、その上に詩が題してある。詩体はどうも蘇東坡（そとうば）の四時（しじ）の詞（し）に倣（なら）ったものらしい。書は確かに趙松雪（ちょうしょうせつ）を学んだと思う筆法である。その詩も一々覚えているが、今は披露（ひろう）

する必要もあるまい。それより君に聞いて貰いたいのは、そう云う月明りの部屋の中に、たった一人坐っていた、玉人(ぎょくじん)のような女の事だ。僕はその女を見た時ほど、女の美しさを感じた事はない。」

「有美閨房秀(ゆうびけいぼうのしゅう)　天人謫降来(てんじんたくこうしきたる)かね。」

趙生(ちょうせい)は微笑しながら、さっき王生(おうせい)が見せた会真詩(かいしんし)の冒頭の二句を口ずさんだ。

「まあ、そんなものだ。」

話したいと云った癖に、王生はそう答えたぎり、いつまでも口を噤(つぐ)んでいる。趙生はとうとう待兼ねたように、そっと王生の膝を突いた。

「それからどうしたのだ？」

「それから一しょに話をした。」

「話をしてから？」

「女が玉簫（ぎょくしょう）を吹いて聞かせた。曲（きょく）は落梅風（らくばいふう）だったと思うが、――」

「それぎりかい？」

「それがすむとまた話をした。」

「それから？」

「それから急に眼がさめた。眼がさめて見るとさっきの通り、僕は舟の中に眠っている。艙（そう）の外は見渡す限り、茫々とした月夜（つきよ）の水ばかりだ。その時の寂しさは

話した所が、天下にわかるものは一人もあるまい。
「それ以来僕の心の中(うち)では、始終あの女の事を思っている。するとまた金陵(きんりょう)へ帰ってからも、不思議に毎晩眠りさえすれば、必ずあの家(うち)が夢に見える。しかも一昨日(おととい)の晩なぞは、僕が女に水晶(すいしょう)の双魚(そうぎょ)の扇墜(せんつい)を贈ったら、女は僕に紫金碧甸(しこんへきでん)の指環を抜いて渡してくれた。と思って眼がさめると、扇墜が見えなくなった代りに、いつか僕の枕もとには、この指環が一つ抜き捨ててある。してみれば女に遇(あ)っているのは、全然夢とばかりも思われない。が、夢でなければ何だと云うと、――僕も答を失してしまう。

「もし仮に夢だとすれば、僕は夢に見るよりほかに、あの家(うち)の娘を見たことはない。いや、娘がいるかどうか、それさえはっきりとは知らずにいる。が、たといその娘が、実際はこの世にいないのにしても、僕が彼女を思う心は、変る時があるとは考えられない。僕は僕の生きている限り、あの池だの葡萄棚(ぶどうだな)だの緑色の鸚鵡(おうむ)だのと一しょに、やはり夢に見る娘の姿を懐しがらずにはいられまいと思う。僕の話と云うのは、これだけなのだ。」

「なるほど、ありふれた才子の情事ではない。」

趙生(ちょうせい)は半ば憐(あわれ)むように、王生(おうせい)の顔へ眼をやった。

「それでは君はそれ以来、一度もその家(うち)へは行かないのかい。」
「うん。一度も行った事はない。が、もう十日ばかりすると、また松江(しょうこう)へ下(くだ)る事になっている。その時渭塘(いとう)を通ったら、是非あの酒旗(しゅき)の出ている家へ、もう一度舟を寄せて見るつもりだ。」
それから実際十日ばかりすると、王生は例の通り舟を艤(ぎ)して、川下(かわしも)の松江へ下って行った。そうして彼が帰って来た時には、――趙生を始め大勢の友人たちは、彼と一しょに舟を上(あが)った少女の美しいのに驚かされた。少女は実際部屋の窓に、緑色の鸚鵡(おうむ)を飼いながら、こ

れも去年の秋幕の陰から、そっと隙見をした王生の姿を、絶えず夢に見ていたそうである。

「不思議な事もあればあるものだ。何しろ先方でもいつのまにか、水晶の双魚の扇墜が、枕もとにあったと云うのだから、――」

趙生はこう遇う人毎に、王生の話を吹聴した。最後にその話が伝わったのは、銭塘の文人瞿祐である。瞿祐はすぐにこの話から、美しい渭塘奇遇記を書いた。

……

×　　×

小説家　どうです、こんな調子では？

編輯者　ロマンティクな所は好いようです。とにかくその小品を貰う事にしましょう。

小説家　待って下さい。まだ後が少し残っているのです。ええと、美しい渭塘奇遇記を書いた。——ここまでですね。

×

×

×

×

しかし銭塘(せんとう)の瞿祐(くゆう)は勿論、趙生(ちょうせい)などの友人たちも、王生(おうせい)夫婦を載(の)せた舟が、渭塘(いとう)の酒家(しゅか)を離れた時、彼が少女と交換した、下(しも)のような会話を知らなかった。

「やっと芝居が無事にすんだね。おれはお前の阿父(おとう)さんに、毎晩お前の夢を見ると云う、小説じみた嘘をつきながら、何度冷々(ひやひや)したかわからないぜ。」

「私(わたし)もそれは心配でしたわ。あなたは金陵(きんりょう)の御友だちにも、やっぱり嘘をおつきなすったの。」

「ああ、やっぱり嘘をついたよ。始めは何とも云わなかったのだが、ふと友達にこの指環(ゆびわ)を見つけられたも

のだから、やむを得ず阿父さんに話す筈の、夢の話をしてしまったのさ。」

「ではほんとうの事を知っているのは、一人もほかにはない訳ですわね。去年の秋あなたが私の部屋へ、忍んでいらしった事を知っているのは、——」

「私。私。」

二人は声のした方へ、同時に驚いた眼をやった。そうしてすぐに笑い出した。帆檣（ほばしら）に吊った彫花（ちょうか）の籠には、緑色の鸚鵡（おうむ）が賢そうに、王生と少女とを見下している。

……………

編輯者　それは蛇足（だそく）です。折角の読者の感興をぶち壊すようなものじゃありませんか？　この小品が雑誌に載るのだったら、是非とも末段だけは削（けず）って貰います。

小説家　まだ最後ではないのです。もう少し後（あと）があるのですから、まあ、我慢して聞いて下さい。

しかし銭塘の瞿祐は勿論、幸福に満ちた王生夫婦も、舟が渭塘を離れた時、少女の父母が交換した、下(しも)のような会話を知らなかった。父母は二人とも目(ま)かげをしながら、水際(みずぎわ)の柳や槐(えんじゅ)の陰に、その舟を見送っていたのである。

「お婆さん。」

「お爺さん。」

「まずまず無事に芝居もすむし、こんな目出たい事はないね。」

「ほんとうにこんな目出たい事には、もう二度とは遇(あ)

えませんね。ただ私は娘や壻（むこ）の、苦しそうな嘘を聞いているのが、それはそれは苦労でしたよ。お爺さんは何も知らないように、黙っていろと御云いなすったから、一生懸命にすましていましたが、今更（いまさら）あんな嘘をつかなくっても、すぐに一しょにはなれるでしょうに、――」

「まあ、そうやかましく云わずにやれ。娘も壻も極（きま）り悪さに、智慧袋（ちえぶくろ）を絞ってついた嘘だ。その上壻の身になれば、ああでも云わぬと、一人娘は、容易にくれまいと思ったかも知れぬ。お婆さん、お前はどうしたと云うのだ。こんな目出たい婚礼に、泣いてばかりいて

はすまないじゃないか？」
「お爺さん。お前さんこそ泣いている癖に……」

×　　　×　　　×

小説家　もう五六枚でおしまいです。次手(ついで)に残りも読んで見ましょう。

編輯者　いや、もうその先は沢山です。ちょいとその原稿を貸して下さい。あなたに黙って置くと、だんだん作品が悪くなりそうです。今までも中途で切った方

が、遥（はるか）に好かったと思いますが、――とにかくこの小品（しょうひん）は貰いますから、そのつもりでいて下さい。

小説家　そこで切られては困るのですが、――

編輯者　おや、もうよほど急がないと、五時の急行には間（ま）に合いませんよ。原稿の事なぞはかまっていずに、早く自動車でも御呼びなさい。

小説家　そうですか。それは大変だ。ではさようなら。何分（なにぶん）よろしく。

編輯者　さようなら、御機嫌好う。

（大正十年三月）

底本：「芥川龍之介全集４」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年１月27日第１刷発行
１９９３（平成５）年12月25日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月19日公開
２００４年３月８日修正